

2022年は、国際マンガ研究センターにとって、そして私自身にとっても、忘れ難い年となりました。その理由は、初代の当センター長を務められた、牧野圭一先生が8月にお亡くなりになったためです。享年84歳でした。

牧野先生は1994年9月に京都精華大学へご着任されて以来、漫画家と大学教員という二足の草鞋だけでなく、高知県の「まんが甲子園」をはじめ、さまざまなマンガに関するイベントのプランナーやプロデューサーとして、さらには、日本漫画家協会や日本マンガ学会の理事として、八面六臂の活動を精力的に続けられました。2008年3月に本学をご退職されるまでの経歴に限っても、マンガ学科長、情報館長、マンガ文化研究所長、マンガ学部長、国際マンガ研究センター長と、マンガに関わるほとんどのポジションで初代のリーダーを務めてくださいました。しかも毎週、自宅のある千葉の船橋と勤務地の京都を新幹線で往復されていたのです。

文字通り常人離れたそのご活躍ぶりは、多くの関係者のみなさんをご存知のところでしょう。もちろん私自身、頭が下がる思いは同じです。ただ、マンガ文化研究所に在職中、つまり牧野先生の直属の部下として勤務していた頃に、正直に告白すると、あまりにも先生のスピードやスケールが凄すぎて、付いていくのが精一杯の時期もありました。

今でも忘れられない言葉があります。あれは、2001年7月末に日本マンガ学会の設立を何とか助成したあと、同年11月に控えた第1回大会・総会を準備していた時のことだったと思います。当時の同僚である山田千恵さんとほとんど二人で学会事務局を運営していて、慌ただしい毎日を過ごしていたところ、マンガ学会のやはり初代事務局長に就任されていた牧野先生がいつもの笑顔でこう仰いました。

「吉村さん、忙しそうですね。仕事を四つ五つ抱えていると大変でしょう。でもね、僕の経験から言えば、七つ以上抱えてさらに二桁になれば、むしろ楽になりますよ」と。

最初は何のことだか、にわかに理解できませんでした。自分の仕事の要領がわるいのか、もっとがんばれという励ましなのか、これからさらに忙しくなることへの予告なのか、そもそもどうして仕事が増えれば楽になるのか……。いずれにせよ、そのあとずっと記憶に残る言葉となりました。

ですが、今ではわかります。いえ、わかったような気がしているだけかもしれませんが、あの言葉には決して他意や皮肉は無く、牧野先生の率直なアドバイスであり、仕事を楽しく進めるための極意だったのです。そう、あれこそが「牧野流」の教えだったことが、のちに私もそれなりの経験を積む中で、ようやく実感とともに理解できてきました。

私たち国際マンガ研究センターには、これまで10人を超える研究員が在籍しましたが、嬉しいことに、その大半が別の大学やマンガ関連施設に就職し、各々に活躍しています。その仲間たちとセンター在籍中の思い出になると、京都時代の勤務経験がどんなに大変だったか、だけど、それ以上にどれだけ楽しかったか、ほぼ口を揃えます。2006年の設立当初からずっとセンターに所属している身からすると、これは嬉しい限りです。もちろん、それは「牧野イズム」が歴代の研究員たちに受け継がれていることの証だからです。

牧野先生、あたたかいご指導をありがとうございました。現在のIMRCのメンバーも、この年次報告書をご覧いただければわかる通り、たくさんのマンガに関わる仕事を楽しみながら進めていますので、草葉の陰から見守っていただければ幸いです。改めて、衷心よりご冥福をお祈りいたします。

2023年2月20日

次ページ以降に、2022年10月1日から、京都国際マンガミュージアムに設置された
牧野圭一先生を追悼するコーナーパネル
(配布版。以下にてDL可。 https://kyotomm.jp/news/news_makino_memorial_corner/)を再録する。

▶
パネル展示風景。



